

大学院プログラムDIGES の強化について

DESKは大学院におけるドイツ・ヨーロッパ教育の強化を検討してきたが、平成15年度より修士課程における法律、経済、社会科学などの現代ヨーロッパを研究する大学院生を支援する制度を拡充することとなった。DESKはこれまでDIGES(Diploma for German and European Studies)の制度を設けて、駒場キャンパスにおける教育制度の中で運用してきた。このDIGESは学生の学位取得のために必用とされる既存の履修規定とは別に、ヨーロッパ研究に対する学習と研究の意欲と成果をDESKが独自に認定するものであって、2000年10月の発足以来、DESKの活動の一つの大きな柱として成果をあげてきた。このDIGESには学部を対象としたDIGESと大学院を対象としたDIGESが存在している。

DIGESは、駒場キャンパスに所属する前期課程・後期課程全ての教養学部学生が対象とされる制度である。DIGESの認定を受けるためには、教養学部の学生についてはDESKの定めた一定の条件を満たした上で、所定の期間内に学生自らがDESK事務室に認定の申請を行うことになっている。

今回拡充の対象となったのは、大学院生を対象としたDIGESの制度である。このDIGESは、東京大学の全ての大学院生が対象とされる制度であり、DIGESの認定を受けるためには以下の条件を満たした上で、所定の期間内に学生自らがDESK事務室に認定の申請を行う。

- 1 DESK助成金の交付を受け、その成果を活用したヨーロッパに関する修了論文を提出し単位が認定されたもの。
- 2 DESK助成金の交付を受け、その成果を活用した研究成果を公刊したものの。

以上のような制度をすでに2000年10月より運営しているが、DESKは駒場キャンパスにとどまらず本郷キャンパスも含めて、設立時からの一つの目標

であった法律・経済・社会科学分野の大学院教育を大学全体として強化することに一層貢献するために、DIGESの拡充をおこなうこととした。

DESKのこれまでの活動は主として駒場キャンパスを中心とするものであり、実際には本郷キャンパスの学生は参加しにくいものとなっていた。現状の限られた予算枠においては、大学院教育の社会科学分野における教育は容易ではないが、2003年4月から教育プログラム(DIGESのなかでとりわけ修士課程で社会科学分野に重点をおくもの)を開始する。この教育プログラムには、東京大学で開設される現代ヨーロッパ関係の法律・経済・社会科学分野の修士課程大学院科目が登録されており、これらの科目群を一定の規定に従って履修する大学院生に対してDESKの奨学助成金を交付することによって、学生を支援することを予定している。

このプログラムに参加を希望する学生は、年度の開始時にDESKに登録するものとする。それに基づき選考を行い、奨学助成金を交付する。現在DESKは大学院生に対して学期ごとに最高額20万円の研究・調査のための助成金を交付しているが、平成15年度からこのプログラムに参加する学生に対しては、研究テーマと進捗度に応じて、主として研究に不可欠な資料収集など調査活動を支援するために、一人当たり年間80万円までの助成をおこなうことを計画している。

対象となる学生は、東京大学大学院に在学する全ての学生であり、現代ヨーロッパを対象として、法律・経済・社会科学などの方法論で研究している学生とする。当面は修士課程の学生の助成を主たる対象とするが、博士課程学生の助成も実施が検討されている。

さらにDESKはこのDIGESの拡充のために、現代ヨーロッパの大学院教育を今回の計画と密接に関連した専門分野で強化することを目指して、客員教官をお招きすることとした。平成15年度は国際基督教大学教授植田隆子氏

に欧州安全保障を対象とする大学院演習を、甲南大学助教授水島次郎氏に欧州比較政治学・オランダ政治を対象とする大学院演習を担当していただく予定である。

なおこの新しいDIGESの運営方針の実施によって、これまで実施されてきた人文分野における大学院生の助成は縮小されるが、小規模ながら助成は継続される予定である。

この制度の詳細については、平成15年度が始まり次第、履修規定と手続きがDESKのホームページならびに授業担当教官より公表される予定である。

森井裕一(地域文化研究専攻)

DESK文化フォーラム ギュンター・ラウツ氏講演会 「民族問題の解決

ヨーロッパの一例」

2002年10月25日(金曜日)

於：東京大学駒場キャンパス
10号館301会議室

2002年10月25日、DESKではヨーロッパ・アカデミー(イタリア、ボルツァーノ)のギュンター・ラウツ氏をお招きして、講演会「民族問題の解決 ヨーロッパの一例」を開催した。この講演でラウツ氏はハプスブルク家の君主制の南に位置する南チロルが、イタリアの北部に位置することになる現在の南チロルにいたる歴史的展開を述べ、今



日のイタリア語ドイツ語併用地域の学校における言語教育などを中心に、いわゆる「南チロル紛争」の解決努力の内容を詳しく報告した。南チロルのような「成功した」政治的・経済的自治区が、現代世界のヨーロッパ内部は言うに及ばずヨーロッパの外においても、どちらかと言えば中央集権的な国家体制の中で、モデル・ケースとして機能することが力説された。講演に続いて、チベットやコソボの紛争解決のモデルに対するヨーロッパ・アカデミーの協力を例に取りながら、アジアや日本でもそのような地域協力があろうのかについて討論がなされた。

ヨーロッパ・アカデミーではこの8月より、オーストリア・グラーツ大学、ルクセンブルクのヨーロッパ研究所、およびヨーロッパの諸大学と協力して「ヨーロッパ統合と地域主義」に関する新しいマスター・コースを開講するとのこと。

関心のある向きは

<http://www.eurac.edu/meir/>をご覧ください。

臼井隆一郎

(DESK運営委員長・言語情報科学専攻)

第7回現代史フォーラム

2003年1月31日(金曜日) 16:00-18:00
駒場キャンパス 8号館302A号室

第7回フォーラムは、日本学術振興会外国人特別研究員として来日中の楊彪氏(華東師範大学副教授)をお招きして講演会を行った。楊氏の本来のご専門は歴史教育の国際比較であるが、DESKの要望で中国におけるドイツ研究の現状と課題について論じてもらった。楊氏はゲオルク・エッカート国際教科書研究所(ブラウンシュヴァイク)で長期研究滞在をされた経歴もあり、現代ドイツの歴史学・歴史教育にも通じておられる方である。本講演にはDAAD東京事務所のドゥッペル高山氏を含め学内外から二十名近くが参集し、講演後の親睦会では日中間のドイツ・ヨーロッパ研究の協力、今後の連携の可能性をめぐり熱心な意見交換が行われた。以下は講演内容の要約である。

石田勇治(地域文化研究専攻)

中国における ドイツ研究の現状と諸問題

楊彪

周知のように中国の学界では、ドイツ研究は常に重要な領域と見なされている。中国近現代の歩みは、マルクス主義などドイツの政治思想に深い影響を受けてきた。ある意味で、中国は、アジア諸国の中でドイツにもっとも深く影響された国であると言えるだろう。ドイツ研究には特別な意味があるのである。

ドイツ研究に関する 主要な研究機関

現在、中国のドイツ研究は主として以下の5つの機関で行われている。

- 1) 中央と地方の政府機関(省級以上)には、これらに直属する研究機関とシンクタンクが設置されている。ここでの研究の特徴は、問題解決のための速効性である。
- 2) 中央と地方各省には「社会科学院」が設立されている。ここにおける社会科学研究の特徴は、全体的に理論的性格が強いこと、また中長期的で体系的な研究が行われていることである。
- 3) 全国的に有名な総合大学と外国語高等専門学校にもドイツに関する研究機関が存在し、研究者が配属されている。(上海・同済大学のドイツ研究所はとくに有名)ここでは主として基礎的な研究が行われ、ドイツに関連する人文・社会諸科学を研究するための語学教育が重視されている。
- 4) 中国共産党中央機構に付属する党機関や党教育機関、たとえば中国

共産党中央党校や各省市級党校、中国共産党中央対外連絡部、中央編集翻訳局などでもドイツ研究が行われている。そこでの主たる課題は政策研究である。

- 5) 中国の軍事機構である国防大学と軍事科学院でもドイツ研究が行われている。ここでは、専門性の高い研究が行われている。

中国におけるドイツ研究の特徴

- 1) ドイツ古典文学や哲学に関する研究は依然として重要と見なされているが、最近では、現代文学や現代史に関する研究も注目を集めるようになってきた。
- 2) 研究の重心は、現代ドイツ研究へと移行しつつある。マルクス主義を重視してきた伝統的なドイツ研究に対して、現代のドイツに関するさまざまな研究領域(政治学、経済学、法学、国際関係、社会学、教育学、民族学、歴史学、哲学、文学など)について焦点を絞って研究する傾向が生じている。
- 3) 目下のところ、ドイツの文化的特性、ドイツ統一、ドイツと欧州連合の動向に最大の関心が寄せられている。

現在のドイツ研究における 主要な関心

- 1) 中国の学界では、中国の近代史はドイツのそれと似通っているとの見方が強く、とくに近代中国の変革思想はイギリスやアメリカの自由主義よりも、ドイツのロマン主義と比較できる点が多いと考えられている。
- 2) ドイツの文化的特性をめぐっては、



楊彪氏(華東師範大学副教授)

ドイツ文化の主要な担い手は市民ないし市民社会であり、ドイツ文化は国家や政治権力から距離をとってきたとみなされている。そのことは、文化の生命力を生み出し、抽象的な思考を可能にしてきたと考えられている。

- 3) 中国の研究者はドイツの戦争認識に大きな関心を寄せており、この点でしばしばドイツと日本が比較される。
- 4) ドイツの近代化については、ヴァイマル共和国の社会民主主義理論が人類史上初めての壮大な実験であり、そこには注目すべき先進性があったと考えられている。
- 5) 中国も分裂と統一という現実の政治問題を抱えているため、国家統一問題を解決するモデルとして、ドイツ統一に関連する諸問題が注目されている。
- 6) 現在のドイツ社会から中国が学べべきこととして、ドイツの政党システムと政治理論(とくにドイツ社会民主党、「第三の道」論など)、社会的市場経済システム、社会保障制度などが挙げられる。



日韓現代ヨーロッパ研究会プログラム



DESK
日韓現代ヨーロッパ研究会

2002年12月27日(金曜日)
於：中央大学(韓国ソウル市)

中央大学(韓国ソウル市)において2002年12月27日DESK主催の「日韓現代ヨーロッパ研究会」が行われた。この「日韓現代ヨーロッパ研究会」は2001年秋にDESKの東アジアにおける学术交流企画の一つとして現代ヨーロッパを政治学的手法で研究している日本と韓国の研究者が立ち上げたものである。これまでに2001年秋に森井がソウルを訪問し、2002年2月にHoon Jaung氏(中央大学)が駒場キャンパスを訪問してコロキウムを実施している。

今回の研究会には日本側から森井裕一(DESK)、八谷まち子氏(九州大学)、小川有美氏(千葉大学)、韓国側からHoon Jaung氏(中央大学)、Won-Taek Kang氏(崇實大学)、Jae-Seung Lee氏(外交安保院)の6名が参加した。10時から開始された研究会は、各人の研究報告とディスカッションが17時まで行

われた。

最初に報告した森井は、"Development of the European Security and Defense Policy (ESDP) and the German Security Policy"と題して、冷戦後のヨーロッパ安全保障環境の変容と共通安全保障防衛政策の展開についてドイツの内政との関連で発表をおこなった。引き続きWon-Taek Kang氏は、イギリスの選挙にヨーロッパ統合問題がどのように作用しているかについて詳細なデータ分析をおこなったペーパーを "Impact of the Europe Issue on the 1997 British General Election" と題して発表した。午前のセッションの最終報告者Jae-Seung Lee氏は "European Union and East Asia: External Dimension" と題して、EU委員会の報告書を中心に東アジアとEUの政治関係を議論した。

ed Legitimacies: Is the EU an Open Deliberative Polyarchy?" と題して報告をおこなった。引き続き最後に報告した八谷まち子氏は小川氏の報告と密接に関連した報告 "Principle of Subsidiarity for the Construction of

2002年9月25日(水曜日)~
9月27日(金曜日)
於：東京大学駒場キャンパス
数理科学研究科棟大講義室

本シンポジウムは、下記の日程・内容により、使用言語・英語(通訳なし)で開催された。

Keynote address :

(25 September 2002, 15:30-17:00)

Eimi Watanabe (sociologist, UNDP, currently on leave), Copenhagen.

International Migration:

A Human Development Perspective

Session I:

Changing Perspectives on Migration:
Focus on the Consciousness of Migrants

1. The Perception of Distance:
Migrants' Attitudes towards Movement across Space.

Presenter:

Leslie Bauzon (historian, University of the Philippines; visiting professor at the University of Tsukuba. 1 April 2002 - 30 September 2004).

2. The Migration Policy of the European Union.

Presenter:

Dietmar Herz (political scientist, Vice-President of the University of Erfurt).

3. Community beyond the Border.
An Ethnological Study of Chuukese Migration in Micronesia.

Presenter:

Keiji Maegawa (anthropologist, University of Tsukuba).

Discussants:

Kazuo Masuda (philosopher, University of Tokyo).

Yasumasa Sekine (anthropologist, Nihon Joshi University).

Session chair:

Yoichi Kibata (University of Tokyo)

Session II:

New Approaches to Migration:
Regional Migrations Systems and
Regional Integration Processes

1. Migration, National Identity and
Regional Integration:

Some Political Perspectives from
Europe and Latin America.

Presenter:

Wolfgang Hein (historian/political scientist, German Overseas Research Institute Hamburg / University of Hamburg).

2. Migration and Agenda of Regional
Cooperation in East and Southeast
Asia

Presenter:

Motoko Shuto (political scientist, University of Tsukuba).

3. Migration and the Cross Border
Cooperation between EU and its
Neighboring Countries

Presenter:

Kazu Takahashi (political scientist, Yamagata University).

Discussants:

Yuichi Morii (political scientist, University of Tokyo).

Michio Araki (religious studies; emeritus University of Tsukuba).

Session chair:

Nobuhiro Shiba (University of Tokyo).

Evening Lecture:

Yasemin N. Soysal (sociologist, University of Essex):

Diasporas, Citizenship, and Human Rights

Session III:



C・ケイザー氏(駐日欧州委員会代表部)を囲んでの夕食会



ドイツ外交官講演
(F・ハルトマン氏)

論議を簡単に紹介した。そして最後に、CFSPの政策決定過程について具体例をあげながら解説した。学生との議論では、欧州憲法をめぐる論議、EU・トルコ関係、EUとASEMとの比較などがテーマにあがった。

ケイザー氏も触れたEU改革論議については、11月26日に開催したF・ハルトマン(Hartmann)書記官(ドイツ大使館)による講演「ドイツの対EU政策」において、さらに深く掘り下げられた。「欧州の将来に関する協議会」について精通しているハルトマン氏は、まず協議会の成立過程とその構成員について紹介した。次に、EU拡大によって25カ国体制が実現した後のEU構造改革をめぐる、協議会での論議を解説した。その際、具体例としてドイツの改革案が紹介され、フィッシャー外相を協議会メンバーとするドイツが統合推進に向けて新たなフレームワークを提案していると述べた。さらに、欧州



スロヴェニア外交官講演
(M・ヴォデブ氏)

憲法をめぐる論議についても触れ、ドイツとイギリスとの間に見られる意見の相違を指摘した。ハルトマン氏は最後に、EUの民主的正当性の強化が改革において重要であると述べ、将来のEU政府のあり方をめぐるメンバー諸国間の見解について解説した。学生との議論では、EU・アジア関係、EU・アメリカ関係、拡大EUにおけるドイツの役割、欧州議会の今後のあり方等がテーマとなった。

チュートリアルで昨年から主要テーマとして取り上げているEU拡大については、今回、NATO加盟の決まったスロヴェニアを事例に取り上げた。昨年度夏学期に引き続き、スロヴェニア大使館からM・ヴォデブ(Vodeb)書記官をゲスト講演者として招き、12月3日に講演会「スロヴェニアの外交政策：NATO加盟とEU加盟を中心に」を開催した。プロジェクターを用いた講演では、まず91年スロヴェニア独立以降の



欧州経済に関する講演
(M・シュルツ氏)

安全保障問題と軍事事情について解説された。ヴォデブ氏は次に、NATO加盟プロセスについて、「平和のためのパートナーシップ」・「NATOメンバーシップ活動プラン」を中心に説明し、2004年NATO加盟に関する決定の背景を紹介した。ヴォデブ氏はまた、スロヴェニアのNATO加盟の理由と、NATO加盟後の安全保障政策の変化について概観した。次にテーマはスロヴェニアのEU加盟プロセスに移った。ここではまず、加盟交渉の進展の様子が紹介され、財政面と農業問題における課題が指摘された。最後に、2002年10月に開かれたブリュッセル欧州理事会における成果や、12月に開催されるコペンハーゲン欧州理事会への展望についても話題が上がった。その後は、スロヴェニアの経済事情や旧ユーゴ諸国及びEU諸国との関係等を中心に、学生との議論が展開された。

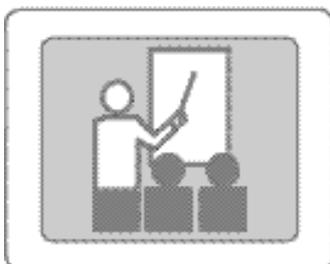
続いて欧州経済問題をテーマに、12月10日、ドイツ人経済学者M・シュルツ(Schulz)氏(富士通総研経済研究所)による講演「ユーロ経済と今後のEU」を開催した。昨年度冬学期にチュートリアルで欧州経済通貨同盟EMUに関する講演を行ったシュルツ氏は、今回、通貨導入一年後の欧州経済について詳説した。講演会では前回と同様にプロジェクターにより数多くのグラフや表が紹介され、複雑な経済理論がわかりやすく解説された。シュルツ氏は、まず導入部として、欧州経済統合プロセスとEMUについて概説した。つぎに、欧州中央銀行ECBの通貨政策や財政政策をテーマに取り上げ、EMU拡大後の問題点を指摘するとともに、財政改革の必要性についても触れた。そして最後に、シュルツ氏は経済学の視点から

EU拡大への展望について語った。講演会は学生との対話方式で進み、特にEU拡大と欧州共通農業政策CAPの問題、トルコのEU加盟問題、ユーロの将来等が議論のテーマとなった。

以上のような欧州専門家によるゲスト講演会に加え、冬学期のDESKチュートリアルでは、院生・学生による個別テーマに関する報告も行った。まず、ケイザー氏講演会の直前の11月5日に、欧州安全保障に関する知識を高めるため、河村弘祐氏（大学院総合文化研究科博士課程）が「ヨーロッパ安全保障秩序の変遷と課題」をテーマに報告を行った。この報告では、東西冷戦史が概説されるとともに、旧ユーゴ民族紛争を事例に、欧州安全保障に関する理論的分析が行われた。11月19日には、中津海裕子氏（文学部4年）が「北欧文化」について報告を行った。ここでは、自らの北欧滞在経験をもとに、ノルウェー、スウェーデン、デンマークの日常生活・社会問題から言語・歴史・宗教、そして美術に至るまで、詳細に説明された。また2003年1月14日に行った、藤田葵氏（教養学部2年）による報告「21世紀日本の外交戦略形成の視座：ロシア国家戦略の変遷を踏まえて」では、プーチンの政策、ロシア・欧州関係、北東アジア域内安全保障について考察され、日本外交の課題と展望について、参加者との間で議論が展開された。

このように、2002年度冬学期のチュートリアルでは、欧州政治経済に重点を置くとともに、社会や文化に関するテーマも取り上げ、議論を展開してきた。参加者にとって、ヨーロッパ研究を進めるうえでのさらなる刺激となっていれば幸いである。チュートリアルが専門家による講演会としてだけでなく、学生報告の場としても広まっていくようにすることが、今後の目標である。

井関正久（DESK）



日独通訳者養成プログラムについて

通訳者養成プログラムのイニシアティブをとっていただいている相澤啓一氏（筑波大学助教授、本学非常勤講師）に寄稿していただいた。

2002年度、DESKの活動の一環として、日独通訳者養成プログラムを立ち上げることができた。その活動報告を行うにあたって先ず考えたのは、「真に学際的な高い水準の教育と研究を推進する」ことを使命とするDESKにとって通訳者養成プログラムという活動はどのような意味をもつか、ということである。というのも、従来日本では、通訳者養成という領域は高等教育の範疇に属するとはみなされず、学術・研究とは無縁の領域の、単なる特殊職業程度にしか扱われてはこなかったからである。その意味でまず、通訳者養成がなぜDESKの理念に合っているのかを、幾分かの自己正当化を含めて説明するところから始めたいと思う。

「通訳」という職業にはさまざまなイメージがつきまわっている。同時通訳が日本で脚光を浴びたのはアポロ月面着陸のテレビ中継における西山千氏らによる名通訳がきっかけとなったと言われるが、そのように華やかな特殊能力の持ち主だけが通訳者として仕事をしているわけではない。早い話、日本語の出来ない外国人が日本にやって来るときには何らかの形の通訳者が登場することになるわけであって、そうした「通訳」なら多くの人が自ら経験したこともあるだろう。実際、「随行通訳」や「観光通訳」なら学生バイト程度の能力でやっていけることもあろうし、オリンピックなどの巨大国際交流の場では大量のボランティアが「通訳」として活躍することとなる。ただし、そうした際の仕事内容は、言語サービスというよりは、身の回りの世話全般をする「よろず世話係」となり、そこで必要とされる語学力は、「なんとかコミュニケーションができます」程度で事足りるということも多い。そうした「通訳さん」に求められるのは、まず第一に「外国語もできるお手伝いさん」としての能力なのである。

しかしながら、通訳者のこうした多

様なあり方が、通訳という職務に対する一般的な理解をかえって歪め、通訳という職業の地位がとかく不当に低く見られたり、日本における通訳者養成の制度化がたち遅れたりしている要因となってきたとも言えるだろう。そこで、まずプロフェッショナルな「通訳者」がどのような職業であるのかを規定する必要に迫られる。私達が今回のプロジェクトにおいて「通訳」と言うときには、観光等の随行通訳などは含めず、会議通訳のことだけを考えている。すなわち通訳とは、政治・経済・学術・芸術等の各分野の専門家同士の間コミュニケーションを成立させるための極めて専門性の高い知的能力を要する職業のことなのである。その意味の通訳者とは、「外国語ができる特殊技能者」であるだけではない。通訳者にとって、自分の母語以外の異言語ができるということは、必要能力のうちの一部にしか過ぎないからであり、その意味で通訳能力とは、単なる語学力などのことではないからである。通訳能力とはむしろ、高度に専門性の高い分野における異文化間コミュニケーションを実現するための「総合的テキスト能力」のことである。

日本で活躍する通訳者の圧倒的多数は、日英両言語間の通訳者である。英語に関しては、従来からのさまざまな民間通訳者養成学校に加え、高度職業人養成の大学院設立が奨励される近年の傾向を受けて、立教大学や青山学院大学など大学院レベルでの通訳者養成機関も増えつつある。それに対し、英語以外の外国語に関する通訳者の数は現在も極めて限られており、ドイツ語も例外ではない。ドイツ語は、国内では戦前の旧制高等学校以来、英語に次ぐ第二外国語の地位を長く保ってきた言語であるにもかかわらず、学術・研究の世界と通訳者の世界に接点はこれまで乏しく、ドイツ語通訳・翻訳者の養成といった職業教育が大学・大学院においてなされることはなかった。一方で優秀な通訳者が慢性的に不足しているのに、他方で、たとえ自分のドイツ語能力を職業で活かしたいと希望する若者がいても、高度なドイツ語能力を身につける方向での職業教育を受けられる場は存在してこなかったのである。

本プロジェクトは、そうした社会的

ニーズに応えようとするものである。日独通訳者養成を目指す試みとしては、80年代後半の数年間、三島憲一・中山純の両氏が献身的なボランティア活動によって立ち上げたプロジェクト（東京ドイツ文化センターが支援）があり、現在活躍している多くの日独会議通訳者もそこで研鑽を積んだ経緯がある。その折に半強制的に参加させられ、通訳のイロハを学ぶことによってドイツ語に関する新たな世界を経験できた私にとっては、今回のプロジェクトはささやかな恩返しのお機会でもあった。

今回のDESKのプロジェクトにとっては、国内第一線で活躍中の日独会議通訳者である桑折千恵子氏の計画当初からの全面的協力、さらに昨年夏以降には、同じく日独通訳の第一人者の一人である蔵原順子氏と、四半世紀近くヨーロッパにおける日英独のトップ通訳者として活躍してこられた吉村謙輔氏、さらには筑波大学の同僚でありしばしば会議通訳もこなす上田浩二氏といった、とびきりの講師陣の方々の理解と積極的参加が得られたことが、何より大きな財産であった。また、通訳者養成教育のプログラムを立ち上げるに際して必要な音声機材購入や教室の確保はDESKがあって初めて可能になったことである。これらの条件が揃ったことにより、参加者にとって充実した年間プログラムを実行することができたと自負している。

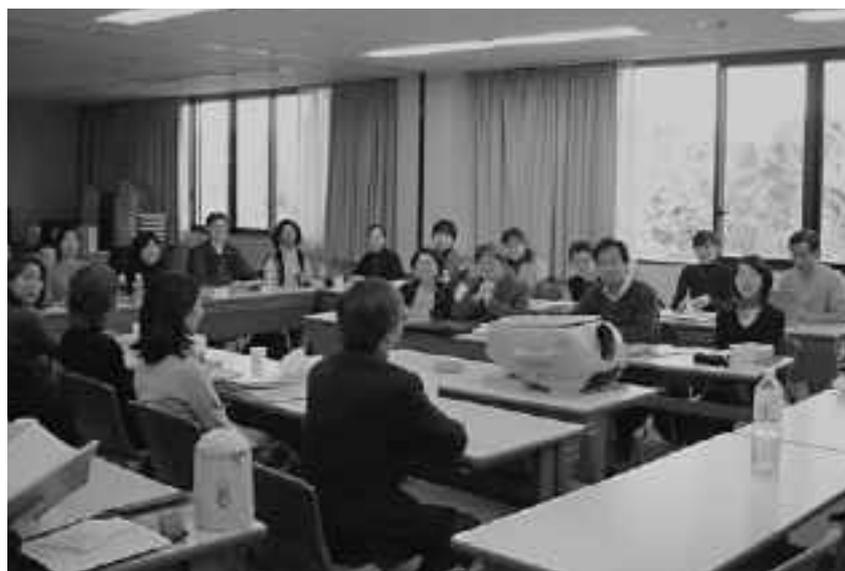
本プロジェクトの主要な目的の一つは、実際に即戦力となる通訳者の養成である。むろん、同時・逐次通訳を日独・独日の両方向でこなせる通訳者を養成することは、一朝一夕にできることではない。経験的には、通訳者を目指す人が実際に仕事を開始できるようになるためには、ドイツ語力に関してゲーテ・インスティトゥートの上級試験(ZOP)ないし独検1級に合格した時点から訓練を始めて少なくとも5年程度かかるというのが、むろん個人差はあるものの大まかな見当である。今回のプロジェクトにおいては、参加希望者を募るのではなく、既に何らかの形で日独間の通訳やそれに準ずる職業に就いている、つまりは既にかなり通訳訓練を積んできている社会人の中から十数名を招待する形で、参加者を選抜することとした。これは、本プロジェクトが、研鑽の場を求める参加者の希望

に応えるものである以上に、能力の高い通訳者を養成するという社会的ニーズに応えるためのものと考えたからである。その上で、そうしたグループとは別に、東京大学を始めとして東京外国語大学や上智大学などでドイツ語を学ぶ学生たちの中からも、参加者を募った。これは、DESKの名称にもある通り、東京大学駒場キャンパスにおける学生教育にも貢献する責務を本プロジェクトが負っていたからでもあるが、いわば10年後を睨んで、将来の日独交流関係の一翼を担うべき学生たちに「職業教育としてのドイツ語教育」がどのようなレベルのものになるかを若いうちから経験してもらい、先々そうした経験を生かしてもらおうという下心によるものでもあった。両グループ間には当然ながら、ドイツ語運用能力上、また総合的な言語能力上の大きな格差が

あり、後者グループは「見学」する局面も少なくなかったものの、そうした異質なグループ間の交流が互いに大きな刺激を与えあったことも一つの収穫であったと思う。

本プロジェクトとしては、さらにそうした具体的な教育活動のみならず、これまで試行錯誤で積み重ねられてきたドイツ語通訳者養成に関するノウハウを蓄積し、今後の体系化に活かしたいという意図も持っている。そのため今後、養成プログラムの現場から得られる知見や経験を文章化して今後に残してゆくことを現在少しずつ考えているところである。

本プロジェクトの具体的な活動は、以下のようなものであった。まず、4月から7月までは毎週金曜日、午後6時半から8時半過ぎまで駒場キャンパスにおいて定期会合を開き、通訳トレー



ニングを行なった。シャドーイングから始まり、発声や朗読、翻訳、同一言語における要約、逐次通訳、同時通訳など一連のメニューをさまざまにこなしていった。1回2時間の訓練時間はあっという間に過ぎ、より集中的に時間を使って心ゆくまで訓練できる機会を望む声が大きくなったので、9月以降は毎月一回集まって、その日は午後の時間をすべて使って長時間訓練ができる形に切り替え、今日に至っている。その間、夏休みと冬休みの2回、合宿による集中セミナー（宿泊等については、参加者の実費負担による）を行なった。何れも、つくば市にある独立行政法人、産業総合研究所・テクノグロースハウスのご厚意により、通訳ブースや会議室、宿泊施設などをお借りして、環境問題をテーマにセミナーを行なったものであり、こちらには関西からも新たな参加者を数名募ることができた。

夏合宿は2002年8月23日～25日の2泊3日で行われ、産業総合研究所の網島群氏による「循環型社会のためのリサイクル技術開発の動向」、および環境コンサルタント Annette Schoerner氏の「Umweltfreundliche Landwirtschaft in Deutschland（ドイツにおける環境に優しい農業）」という二つの講演を素材に、逐次・同時通訳の訓練を行ない、また吉村謙輔氏からはサイト・トランスレーションに関するレクチャーを受けた。また冬合宿は2003年1月10日～13日の3泊4日で、やはり産業総合研究所のエネルギー利用研究部門、加茂徹氏に「日本におけるケミカルリサイクル」と題する講演をお願いして逐次通訳の訓練を行なった他、吉村謙輔氏によるノート・テイキングのレクチャー、そして各参加者による模擬講演・ディベートをもとにした逐次通訳訓練を行なった。後者にはドイツ語ネイティブのご意見番として筑波大学外国人教師のHerrad Heselhaus氏にもご参加頂いた。いずれも、短期間ではあるが極めて集中した訓練ができたため、参加者の能力啓発の上でも、またさまざまな指導プログラムの実験の上でも、非常に大きな成果があったと考えている。

既に記した通り、こうした通訳者養成は、本来は何れかの教育機関において大学院レベルのカリキュラムとして制度化されることが望ましく、このような手弁当方式はあくまで必要に迫ら

れての過渡的形態に過ぎないと考えている。しかしそうした中で、本年度の通訳者養成プロジェクトは、多忙なスケジュールにもかかわらず定期的に時間を割いて養成プログラムにおつきあいいただいたプロ通訳者の方々の情熱と使命感、また、次第に数を増してきた参加者たちのなみなみならぬ意欲と熱意によって、当初の予想を超える大きな成果を得られたと思われる。これらすべての方々に、またとりわけ、2回の合宿でひとかたならずお世話になった産業総合研究所テクノ・グロースハウスの山下安正所長と職員の小野幸子さんと原田赤美さん、さらにDESKの窓口役として会計や事務連絡などの裏方を務めつつ自らも参加なさった水野明美さんに、この場を借りて心より御礼申し上げたい。

このプログラムはとりあえず本年度一年の予定で出発したのであったが、参加者の間では当然のように来年度についての計画が進められており、筑波での次回・集中セミナーについてのさまざまなアイデアも寄せられ始めている。今年度の参加者から、次代を担う日独通訳者が輩出してゆくであろうことは疑う余地がないが、ここで培われてゆく通訳者養成の経験やノウハウもまた、さらに継続的に蓄積され、今後制度的に活かされる日が来ることを願っている。そうした意味において、とりあえず2003年度もまた、このささやかな通訳者養成プロジェクトをより質的に充実した形で継続してゆきたいと願っているところである。

相澤啓一（筑波大学助教授・東京大学非常勤講師）

『ヨーロッパ研究』 第2号近日刊行

『ヨーロッパ研究』第2号が3月に刊行される予定です。第2号の内容は以下の通りです。

I. 論文

1. Das Schicksal der Religion in der globalisierten Gesellschaft
..... Johannes Weig
2. Die Vertriebenenfrage und das Geschichtsbewusstsein der Deutschen
Die Kulturförderungspolitik für

die Vertriebenen in der Bundesrepublik der fünfziger Jahre

..... Atsuko Kawakita

3. 極右問題をめぐる社会学的考察
統一ドイツを事例に

..... 井関正久

4. 2002年ドイツ連邦議会選挙と政治動向

..... 森井裕一

5. ドイツでラジオはどのように聞かれているか

文化によって異なる聞き方と聴取習慣について

..... ウルリッヒ・ハインツェ

6. 現代フランス政治における主権主義政党の生成と展開

..... 吉田徹

7. Was hat "ein schwachsinziges feudalistisches Stück" gebracht?

Über das Todesmotiv im Jasager und seinen Stellenwert in Brechts Lehrstücken

..... Sogo Takahashi

8. 資本と母権 I レヴィアタンとネメシス

..... 臼井隆一郎

II. 活動報告

ご覧のように第2号は論文が8本と活動報告となっております。巻頭論文はDESKの招きで来日されたカッセル大学教授ヨハネス・ヴァイス氏に、昨年3月に駒場でなさった講演に手を加えたものを寄稿して頂きました。この論考はドイツにおけるマルクス以降の宗教についての社会学的な考察を概観し、さらにマックス・ヴェーバーの宗教社会学を手がかりに今日における宗教の「運命」、つまりその行く末と役割について考察したものです。もちろんこれは一本の論文の中で扱うには大きすぎるテーマですが、基本的な問題を整理し、さらには現代社会や将来において宗教がどのような社会的機能や意味を持ちうるかについて問題提起がなされています。2001年9月11日以降宗教の持つ意味について改めて問い直しの作業がグローバルに行われていますが、そのような関連で意義深い論文であると言えます。第1号に所収のラムシュテット教授の論文と同様、ヨーロッパからお招きした先生方の論文の掲載は今後も続けていく予定です。

第1号より論文数が2本減り、また

社会科学系でしかもドイツをテーマとした論文が多くを占めていますが、これは偶然の結果であり、特に編集方針が変わった訳ではありません。DESKは社会科学に重点があるとは言え、ドイツ・ヨーロッパに関する研究を援助するためのDAADの教育プログラムです。その研究成果を発表するための紀要である『ヨーロッパ研究』は、政治や経済から始まり、社会や歴史、言語や文学、思想や哲学まで、ドイツやヨーロッパの社会や文化に関する優れた論文であればどのようなものでも掲載いたします。

第1号所収の論文のテーマが多彩であったのは、大学院生の皆さんの投稿によるところが大きいのですが、今回は大学院生の方々の投稿が少なく、そのために内容的に偏りが出てきたものと思われる。また大学院生の投稿数の減少は、昨年度より締め切りが一ヵ月早まり9月上旬になったためと思われる。締め切りを一ヵ月繰り上げたのは、編集上の技術的な理由によるものです。今回の応募数の減少を考慮して、第3号の投稿締め切りは9月下旬にいたしました。詳しくは下記の論文募集要領をご覧ください。

『ヨーロッパ研究』の最後にはDESKの「活動報告」が載っております。これをお読み頂ければDESKが過去一年間にどのような活動を行ったのかがお分かり頂けます。「1. DESK主催講演会」と「2. DESK主催シンポジウム」は、DESKが主催した講演会やシンポジウムです。これらの催しについての案内は新聞などにも掲載されますが、DESKのホームページをご覧いただければ随時いつでもどのようなDESKの催し物があるかがお分かり頂けます。また「3. DESK共催講演会」は対外的には宣伝しておりませんが、これも興味をお持ちの方は学外の方でもご参加いただけます。「4. DESKチュートリアル」「5. DESK社会科学コロキウム」「6. DESK現代史フォーラム」「7. DESK文化フォーラム」「8. 主題講義」は主に学内の学生・院生・教官を対象とする催し物です。

『ヨーロッパ研究』は紀要という性格上最新の情報をお届けするものではありませんが、この紀要をお読み頂ければ、DESKの多彩な活動やDESKの活動に携わる学生・院生・教官の教育研究活動等をつぶさに知ることができます。

今後ともDESKの活動や『ヨーロッパ研究』へのご支援とご批判を賜れますならば幸甚に存じます。

高橋宗五（超域文化科学専攻）

DESK 『ヨーロッパ研究』 (European Studies) 第3号論文募集

DESKプログラムの研究紀要『ヨーロッパ研究』(European Studies)の第3号に掲載する論文を以下の要領で募集します。

『ヨーロッパ研究』募集要領

1. 執筆資格

- 1) 東京大学大学院総合文化研究科に籍を置く大学院生ならびに教官。
- 2) 1)の規定にも拘らず、DESK紀要審査委員会が適当と認めたる者。

2. 執筆の申し込み

- 1) 投稿希望者は2003年7月31日(木)までに駒場キャンパス8号館1階のDESK事務室まで申し込むこと。
- 2) 申し込む場合には、所属、氏名、住所(或いは連絡先) 電話番号(Fax番号、或いはe-mailのアドレスも含む)、論文の題、使用言語、論文のおよその長さを明記すること。

3. 論文の提出

- 1) ワープロ等を使用し、印字した論文原稿と要旨、各三部、及び論文原稿を入力したフロッピー・ディスクをDESK事務室に提出すること。尚、ディスクには使用したワープロ・ソフトの名を忘れずに記入すること。
- 2) 論文の表紙には、所属、氏名、住所、電話番号を明記すること。
- 3) 締め切りは2003年9月24日(水)。
- 4) 提出場所は駒場キャンパス8号館1階DESK事務室。

4. 執筆論文の条件

- 1) 未発表のものに限る。但し、口頭でのみ発表されたものはこの限りではない。
- 2) 主題は、ドイツ・ヨーロッパ地域の政治、経済、社会、歴史、文化、言語等に関するもの。
- 3) 使用言語は、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、またはスペイン語とする。
- 4) 論文には必ず要旨を付ける。要旨は論文が日本語の場合には上記の

ヨーロッパ言語で、論文が上記のヨーロッパ言語の場合には日本語で書くものとする。

- 5) 論文の長さはレジュメも含めて、日本語の場合400字詰め原稿用紙で換算して70枚以内、欧文の場合には一行80ストロークで換算して700行以内を目安とする。ワープロ等で執筆の場合は、字数が上記の範囲内であればよく、必ずしも原稿用紙に印刷したり、欧文の場合一行80ストロークで書く必要はない。紙の大きさはA4とする。
- 6) 論文要旨は、邦文欧文ともに印刷してほぼ2頁以内となるようにする。これについては既刊の『ヨーロッパ研究』を参照のこと。

5. 論文審査

- 1) 論文の採否はDESK紀要審査委員会が決定し、審査結果は速やかに連絡する。
- 2) 審査委員会が審査の結果、書き直しを求める場合がある。
- 3) 諸般の事情により論文の圧縮を求めたり、二回に分けて掲載すること等を条件に採用することもあり得る。

助成金成果報告

シュタイナー学校に関する研究
～その実践から学ぶべきこと～

【動機】

私は自分の受けてきた教育に疑問を持っていた。1つには人々の意識；「学歴」に代表されるものを良いと考える傾向（外面的には「一流学校か否か」、内面的には「学校で教わるものを重視しその成績を評価する」）、また一方で学校のカリキュラムそのもの；なぜ、を考えさせない（ex.数学で公式が丸暗記。哲学的思索がない。）事象同士の関連性に注目しない（の延長線とも思われるが ex.世界史で「大きな流れ（時間軸・空間軸とも）」を考えない）などである。それらの疑問を持ちながらフリースクールを回ったが、その中で「シュタイナー学校」を知った。先進国でほとんどの国に認可された学校として存在する「シュタイナー学校」そこでどのような教育が行われているのか、調査しようと思った。

【方法】

まず、現場の実践を見る。感じたことから研究を進める。（理由は計画書）

【調査報告】

3つの場所を見学。学校は2つとも見学を受け付けず外部公開用に参加。

1. 京田辺シュタイナー学校
（2002年11月23日）
2. フォーラム3（2002年11月29日）
3. 東京シュタイナーシュール
「おとなのための体験講座・音楽」
（2003年1月11日）

1. 京田辺シュタイナー学校

唯一に近い学校公開日「秋祭り」に伺う。学校は京都から電車で40分ほどの場所。緩やかな山が少し遠くに重なり、近くには家々と田畑。だが大都市京都が近いのか都会と切り離された印象が薄いのが興味深い。報告は i 授業ノートの展示（とその場にいらした先生の話） ii 中村重郎さんの話 iii 子どもたちの様子（授業ではなくギター演奏など）学ぶのは、1年生から8年生（公立学校の小学校1年生～中学校2年生）。生徒数は各学年20人ずつ程度で、来年は9年生ができるとのこと。

i. 授業ノートの展示

- 1) 印象的なのが色彩。字もさまざまな色を用いる。（色遣いは柔らか。原色の緑や赤はたまにしか見られない）どのノートにも絵がある。教科によっては立体模型も。
- 2) 数学：「 $4 - 2 = 2$ 」を「分かれる」という概念を用いて考える。例えばノートの左側には橋の片側にいた4人が、両側に2人ずつになる図がある。動物学：粘土を用いて動物を形作りつつ、その動物の身体の仕組みを学ぶ。
- 3) 教科の分け方は「社会」「理科」と少し違う。「英語」「数学」など公立の学校と同じ教科がある中で「動物学」「京都学」などが存在する。演劇がある。
- 4) エポック授業：毎朝2時間ずつのみ。月曜～金曜まで1限から6限までずっとではない。エポック授業に当てられるのは毎朝8時半から10時半まで。その後「おにぎりタイム」があり、あとは通常の音楽などの授業（特に芸術系が多かった）35分刻み。
- 5) 授業の内容は先生に一任されている。先生が授業の構成から教材まで責任を負う。
- 6) ある程度のカリキュラムは存在する。それは海外のものを参考。この学校の先生方の多くはシュタイナー教員養成学校で学んでいる。（カリキュラムは見せてもらえず）

ii. 中村重郎さんのお話

学校に連絡を取ったとき紹介していただいた先生。来年は新しくできる9年生の担任になる。a.教員養成学校の内容について、b.シュタイナーの思想について特に伺った。

- a. 京田辺シュタイナー学校の先生は、海外の専門の教員養成学校で学んだ人が独学で勉強した人。養成学校で学ぶ内容は特に実践的なもの。先輩教員の実際の授業を受けてそのあと話し合い、など。シュタイナーの思想についてはほとんど学ばない。
- b. 「エーテル体」などの意味するものを「理解」しているかはそれぞれに任せる。シュタイナー学校の教員になる過程で確認はしない。何が「理解」というかさえ難しいのでは？ただ、個人がそれを学ぼうとする時「判断保留」という方法は効果的かも

しれない。中村さん自身、後に「エーテル体」が「こういうことを言いたかったのか？」と思うことがあったそう。宇宙の生成に関する部分は中村さんも「判断保留」。そういう人が多いのではないかと。子どもたちもシュタイナーの思想は学ばない。シュタイナーについては「名前を知っている程度だろう」という。色環などシュタイナーの考え方に大きな影響を及ぼしているゲーテについては名前も知らないのでは、とのこと。

2. フォーラム3

美術講座。「コバルトブルー」を表現する。「コバルトブルーは包み込む色」「光の後ろにある色（ろうそくの後ろに紙を出したときに映る色）だそうで、大きな紙に“（影の部分をコバルトブルー色にして）上半分の真中に白い球体がありそこから下に光が筋状に落ちているような”図を書く。手本をまねる。書く過程では、先生から「包み込むということをうまく表現するように」という注意が何度もあった。一緒に行った友人は、「参加者は、科学的には実証できない何かわりきれないもの（力）に興味を持っていて、書く時間に集中して無になろうとしている気がした。」と言っている。ゆるやかで静かで、独特の雰囲気だと思った。

3. 東京シュタイナーシュール

3カ月に一度ほど開催される「おとなのための体験講座」。教科は「音楽」。先生は普段子どもたちに教えていらっしやる古賀美春先生。授業内容：まず、動く。30人ぐらいの参加者が一斉にその場所を歩き始め、合図で少しずつ座っていく。順番が決められているのではなく自分たちで周りを見ながら「少しずつ」座っていく。次に言葉でも同様に。後の説明「『動く』ことを感じる。音楽は『動き』。例えば『感動』というもの何か『動く』」。次、青銅、鉄、石、貝、木、動物の皮を使った太鼓の音色をそれぞれ聞く。石などは人間が始めに楽器にしたもの？注目したのは、青銅は人の手を入れる前と入れた後で音が違うところ。（入れる前は少しくぐもった感じ。後は澄む。でもどこか神経に障る気も。）また、石や木などと、動物の皮との音の違いにも着目。次、ステップダンスの練習のようなもの。

全員輪になり足で「返し縫」の動きを作る。順番にできるようになる。「ここで『頭でわかること』と『できること』には違いがある。』

【まとめ】

正直、少し「異空間」を感じた。この世界に埋没することにある種の不安を感じることも確かだ。だが理性的に考えてその実践から学ぶべきところは多いと思う。まず 1. 数学に表れるように、概念や理由を大切にすること、2. 動物学に表れるように教科の枠を取り払い、様々な手段で1つのものの理解に努力すること、3. 音楽にあるように、多層的な見方を提案すること。これらには、1つの事象を単に知識として覚えるのではなく様々な見方で見ようとする努力があると思う。現在の学校にも取り入れてしかるべきではないか。

井関 綾（法学部4年）



イタリアにおける資料収集 および研究対象の視察

今回DESKの助成金を受けて、2002年8月19日から10月2日まで、約7週間イタリアに滞在し、現在執筆中の修士論文のための資料収集および研究対象である建築の視察を行うことが出来ました。私が研究しているテーマは20世紀前半に活躍したイタリアの文筆家、クルツィオ・マラバルテがみずからその計画に深く携わったカプリ島の私邸カサ・マラバルテと、それとほぼ同時期に彼が第二次世界大戦の記者特派員としてヨーロッパ各国の戦線に派遣された経験をもとに執筆した“Kaputt”（邦訳タイトル『壊れたヨーロッパ』）の、両者を貫く問題意識、また共通した手法を見出し、“Kaputt” = 「破壊されたもの」という概念を介して「起源」としての「ヨーロッパ」を発見するという矛盾した思考構造を歴史的に検証するということです。2つの主要な研究対象のうち、建築の方は断崖絶壁に建っているという地形的な条件、またローマ帝国皇帝が別荘を建てたというカプリ島という場所の歴史的特異性もあり、現地を訪れて自分の目で確

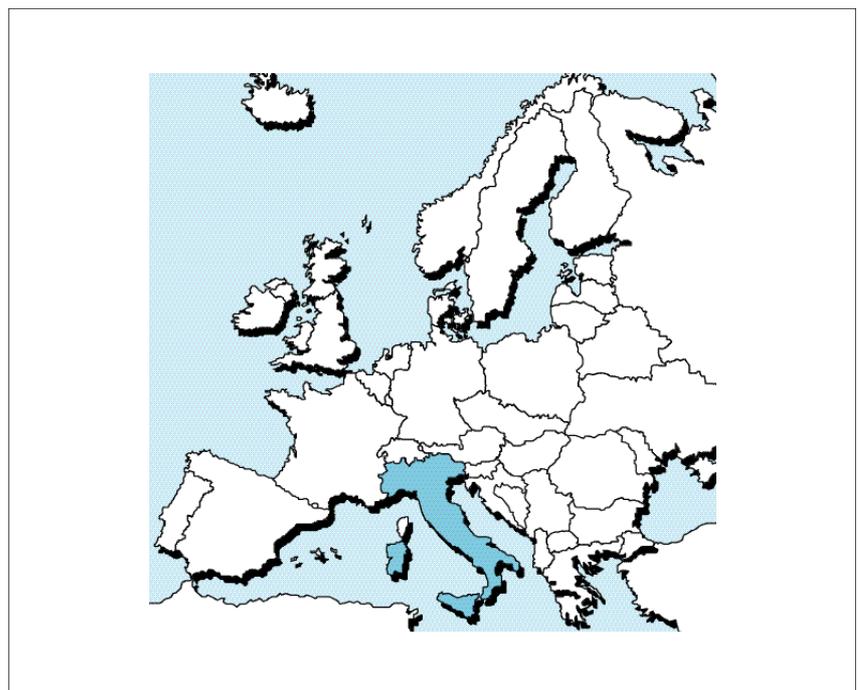
かめるということが不可欠に思われました。またもうひとつの分析対象である“Kaputt”は原書も翻訳も手に入ったのですが、マラバルテのその他の文学テキストやそれについての先行研究、新聞記事として掲載されているジャーナリストとしての仕事や彼が監修していた雑誌など、国内で図書館や書店をあたって発見できなかったり絶版になっているものなど、現地にて資料収集をすることが不可欠でした。以下では実際に行ってきた見学や資料収集のプロセスとその成果について、項目別に報告いたします。

1) カプリ島での研修

カプリ島を訪れた最も大きな目的はカサ・マラバルテの実物を見ることでしたが、現地に行くことを計画しはじめたときから現在の管理者であるRonchi財団にメールや手紙でコンタクトをとろうとしていたにもかかわらず、先方からはついに返事がなく現地での交渉に最後の望みを託してその地を訪れました。ナポリから船でカプリ島に渡り、町の中心部まではケーブルカーで移動しました。カプリ島は概して高低差が激しく、中心部が高台になっていて、東西にそれぞれカプリとアナカプリという2つの街が位置しています。海岸線は大部分が崖のように切り立った地形になっているのですが、目的の建築も例に漏れず島の南東の海に面したMassullo

岬という、海に突き出した舞台のようなたいへん劇的な場所に位置しています。海に沿って曲がりくねった山道を登るとある地点で突然視界を遮っていた木々が開け、そこからあざやかなレンガ色の幾何学的な形が現れます。この地点からさらに財団のプライベートな領域へと階段がつけてあったので管理者に鉢合わせしたら交渉してみるつもりで降りてみたところ、途中2メートル以上もあるかという鉄柵が道を遮り、直談判も果たせませんでした。このようにこの他に陸地からのいくつかのポイントと、島を一周する観光客向けの船上からという非常に限られた条件でしか一般には見ることが許されていませんでしたが、その外観はそこに立ち入ることの難しさが嘘のように思われる程、見られることに開けていました。事実この建築はガイドブックにも載っているような島の主要観光スポットのひとつになっているので、屋上のテラスで日光浴する人物まで含めたその景観はまさしく1つの舞台として、毎日無数の観光客の視線にさらされていることとなります。実際にいくつかのそうした地点からマラバルテ邸を望み、マラバルテの「私は景色をデザインしたのだ」という発言を思い起こさせる、非常に興味深い体験をすることができました。

島では資料収集の面でも大きな収穫がありました。いくつかある書店を見



て歩いたところ、島の古代から現在にかけての通史はもちろん、ローマ帝国皇帝から近代の文豪たちが建てた別荘をも網羅した歴史研究書などを思いがけず手に入れることができました。また、いくつかの図書館やカプリ島に関する文献を集めた資料館があるという情報を得て、短い滞在期間にそのいくつかを訪れることができました。特に有益だったのは数人の職員からなる島の小さな歴史資料館 Centro Documentale dell'Isola di Capriを訪れたことです。ここには島に縁の深い著名人や事柄に関する情報が項目ごとに整理されていました。論文を書いていることを伝えたと「マラバルテ」という名前で作成してあるファイルを見せてもらうことができました。3つのファイルに分けて保存された書類には、マラバルテに関する新聞記事や手紙など、自分でひとつひとつ探せば多大な労力を必要とするであろう資料がカ所に集められていました。管理者の方のご好意で、収集してあるものから必要と思われるものを自分自身で選り分けることを許可してもらいましたが、滞在中になんとか全てに目を通すことができたものの必要な資料がかなりの数になってしまったため、大部分を職員の方がコピーして後日本に送ってくださるということになりました。

また、滞在中にはティベリウスやアウグスティヌスの別荘の遺跡を訪れた他、アナカプリ地区にあるスウェーデン生まれの医者兼文学者アクセル・ムンテの私邸ヴィラ・サン・ミケーレも見学することができました。古代遺跡から拾ってきたような浮き彫りや彫刻、古代建築の一部や大理石の家具からなるその邸宅は、文筆家自身が建築に自ら積極的に関わっているという点でもカサ・マラバルテと共通しており、詳しく経緯をたどって論文に活かそうと考えています。“Kaputt”によればこの邸宅は実際にマラバルテがムンテを訪ねてしばしば足を運んだ場所でもあります。

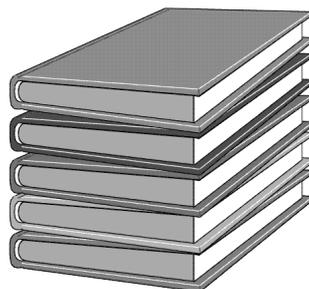
2) ガルダ湖における研修

ガルダ湖を訪れた目的は上でも述べたような、文筆家による私邸の計画という問題意識から、マラバルテが監修する文芸雑誌で何度もとりあげている、世紀末から20世紀初頭にかけて活躍し

た作家ガブリエーレ・ダヌンツィオの邸宅ヴィットリアーレを訪ねることにありました。こちらはミラノから電車で小一時間のところにあり、海ではないものの広大な湖に程近い敷地にあるため、やはり船を利用し最寄りの船着き場からは徒歩でアプローチしました。敷地には湖畔を望む野外劇場やホール、そして戦艦ブーリア号が設置しており、さながらテーマパークのような様相を呈しています。ダヌンツィオが生活していた「修道院」と名付けられた邸宅は、当時のままに保存されている内部が観光客向けに公開されており、ガイド付きで全室を見学することができます。この邸宅では驚くべき数の蔵書、仏像やマリア象、古代やルネッサンスの彫刻のレプリカ、けばけばしい布地の装飾品や置き物といったさまざまな物品の莫大なコレクションに圧倒されます。コレクションを見ていると「壊れたもの」を引き受けるという問題意識を幾許かは共有しつつも、外観もインテリアも構成要素が執拗なまでに厳選されたカサ・マラバルテとはあまりにも対照的であり、論文に興味深い展開の糸口を与えてくれる研修でした。

3) フィレンツェにおける資料収集

フィレンツェでは平日はほぼ毎日国立図書館にて資料収集に奔走しました。図書館は閉架式で、すべての文献はまずコンピューター上で検索・請求しなければなりません。早いものは数分、時間のかかるものは2日あまりでカウンターに文献が届くと、ディスプレイ上に名前が掲示されて受け取れるとい



うシステムでした。複写の依頼もカウンターで受け付けていましたが、係りの人に本を提示して、本の閉じ方の問題でしっかり開かない場合や、古くて傷んだ文献の場合は許可されず、また許可された場合でも15パーセントしか複写できません。そこでどうしても必要な資料はノートパソコンで写したり、大量にある場合はデジカメで記録したりすることもあり、日本でならもっと効率良くできる手続きも思いの他時間がかかってしまいました。

文学作品である“Kaputt”と比較するために、同様の対象についてジャーナリストとしてレポートしているはずの、マラバルテが戦地から書き送った記事が必要でしたが、見当を付けていた“Prospettive”というマラバルテ監修の雑誌は文芸雑誌であり、そこにはダヌンツィオへの言及など参考になりそうな文書も見つかったのでまったくの無駄ではなかったものの、あてが外れてしまいました。しかし同じ図書館の雑誌・新聞閲覧室にて、マラバルテが“Corriere della Sera”紙の三面に30年代の前半からすでに記事を断続的に書いていることが分かり、こちらのほうで期待していたものを見つけることができました。古い記事なので既にマイクロフィルムに保存されていたのですが、マラバルテが何年の何月何日に記事を書いているという情報がなかったため、できるだけ地道に目を通し必要な箇所を複写用紙にメモするという作業が続きました。しかし同紙面では、彼が1933年から約一年に渡り流刑になっていたパリの島での体験談なども記事にしていることがわかり、カサ・マラバルテ、さらに“Kaputt”にいたるマラバルテの思考の動向を、断続的にはありませんが辿ることができそうです。

また、指導教官である田中純先生に紹介していただいた、文芸雑誌のデータベースを保存するドイツ系の機関 Kunsthistorisches Institut in Florenzにも数日間通いました。こちらは国立図書館と違い利用者を制限していましたが、日本から持参した研究室の紹介状を提示して短い面接を受け、1週間の出入り許可証を作成することができました。建築全体が迷路のようになっていて、狭い廊下にもぎっしりと、梯子を掛けても一番上まで届かない天井

近くまで本棚が並んでおり、利用者は全ての書籍を自由に閲覧することができました。複写のシステムが少々複雑で、毎日9時、11時、13時の3回配付されるコピーチケットがないと複写ができないため、作業を数日に分けて行わねばなりません。ここではレポーターとして世界中を飛び回っていたマラバルテの写真家としての業績についての研究書や雑誌記事を見つけることができ、彼が戦争の、そしてヨーロッパのどのような側面に注目し、どのようなものとしてとらえていたかということを考える手がかりとすることができます。また、カサ・マラバルテに関する昨今の雑誌記事がまとめて入手でき、収穫は非常に大きいものでした。

今回マラバルテの故郷にもほど近いフィレンツェという都市に比較的長期間滞在できたことで、研究への情熱を再度確かめることができました。うっかり列車を間違えて、着いたところがフィレンツェから数十分のフォルテ・ディ・マルミというマラバルテの生まれた街だったという感慨深いハプニングは忘れ難いものです。また“Kaputt”ではマラバルテの記憶に眠るたくさんの絵画作品のイメージが呼び覚まされますが、そうした作品のオリジナルが宿から徒歩で行ける美術館にあるという環境で論文執筆の準備ができたことは、この上なく恵まれていたと思います。今回の旅行で得た貴重な経験、および収集した資料を有益に使って、納得のゆく論文を組み立てたいと思います。最後になりましたが、出発直前に地図にも載っていないフィレンツェの情報を伝授して下さった八十田博人氏、ヴィットリアーレとカサ・マラバルテの関係について示唆に富んだ助言を与えて下さった横山正先生、そして学部卒論執筆のテーマ設定の段階から相談にのっていただき、現在にいたるまで行き詰まるたびに激励して下さっている田中先生のご指導があっはじめて、この旅行は実現したのだと思っております。また、このような機会を与えていただいたDESKに深く感謝いたします。

嵯峨紘美

(大学院総合文化研究科
超域文化科学専攻修士課程)



ポーランドにおける研究会 参加と資料収集

〔1〕

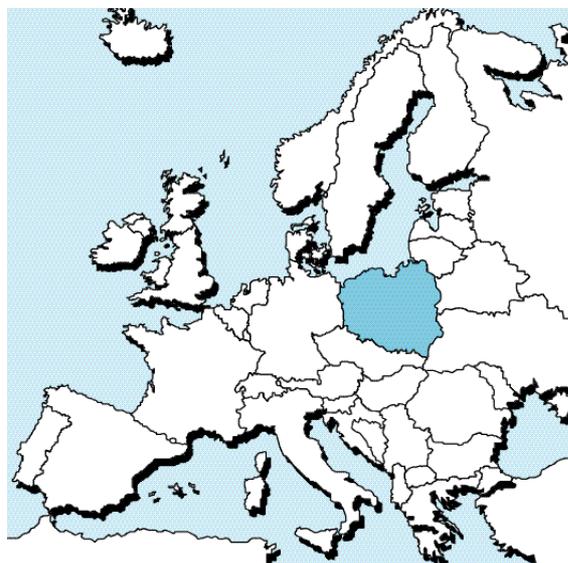
2002年度DESK助成金を受け、2002年11月15日から12月12日、ポーランドにて研究会参加、資料収集を行った。また、このポーランド滞在を利用して、ユダヤ博物館見学、資料収集のため短期でベルリンにも赴いた。今回の渡航の主たる目的は、11月17日から22日にかけて、ポーランド東部の都市ルブリンのルブリン・カトリック大学にて行われた、大戦間期のポーランド作家ブルーノ・シュルツについての国際会議「割れた鏡のかけらの中で ブルーノ・シュルツ1892-1942」への参加であった。この会議は、シュルツ生誕110周年・没後60周年を記念するものである。シュルツのみをテーマとしたこの規模の会議は、生誕100年・没後50周年を記念して10年前に開かれた企画以来のもので、シュルツをテーマに博士論文執筆を計画している私にとっては二度とない貴重な機会であった。また、今回は関連企画も充実したものが予定されていた。作品数の少ないシュルツであるが、その作品は現在に至るまで多くの芸術家にインスピレーションを与え、とりわけポーランドでは繰り返し映画化、演

劇化されている。こうした映画、演劇がまとめて上映、上演されることになっていたうえ、現在シュルツの画作を最も多く所蔵するワルシャワ文学博物館の所蔵品による展覧会も企画されていたのである。

私は2000-2001学年度、東京大学とワルシャワ大学との学術協定に基づきワルシャワ大学に留学していた。その際、今回のシュルツ会議の主催者の一人である、ルブリン・カトリック大学芸術学講座マウゴジャータ・キトフスカ=ウィシャク博士と面識を得ており、今春から当会議の情報を逐次入手することができた。キトフスカ=ウィシャク氏ともう一人の主催者である同大学文学講座教授ヴワディスワフ・パナスは、共に現在ポーランドにおけるシュルツ研究の第一人者である。シュルツは文画両ジャンルの作品を残しているが、とりわけキトフスカ=ウィシャクはその画業、映画化作品を対象に独自の研究を展開している。文学に限定されない最新のシュルツ研究の状況を知る機会となることが期待された。

〔2〕

11月15日に日本を発ち、ワルシャワに入った。今回の渡航は、ルブリンでのシュルツ会議参加の他、日本にいては入手不可能である資料、書籍の収集も目的としていた。ワルシャワ大学に打診したところ、図書館の利用とワル



シャワ大学留学生寮への宿泊の許可を得ることができたため、そこを今回の一ヵ月にわたる滞在の拠点とした。

17日に会議のため、ワルシャワからバスでルブリンに向かった。学術会議は翌18日から始まった。発表、質疑は全てポーランド語で行われた。発表者のほとんどは、教授、博士クラスで、ポーランドの他、アメリカ、ドイツ、イスラエル、ウクライナなど世界各国から集まっており、まさに現在における国際シュルツ会議の名にふさわしいものであった。学術会議自体の会期は4日間で、午前と午後の部に分かれており、それぞれ4～6人による発表が行われた。18日は、シュルツ論において最も頻繁に使用されている1989年刊行のシュルツ全集の編者でもある、クラフのヤギェウォ大学教授イェジ・ヤジェンブスキ教授の発表で始まった。近年のポーランドにおけるシュルツ研究では、カバラーや精神分析学的概念と結びつけた解釈、或る哲学思想とシュルツの思想の近似を論じるものが多く見受けられる。その中で、ヤジェンブスキ教授はあくまで史実とテキストに立脚してシュルツの文学観と文学作品を論じており、研究の基本を再確認させられた。研究会における発表は、そのテーマによっておおまかに各日に割り振られていた。18日の午前は主にシュルツの画業をテーマにした発表、午後は笑いという観点からの研究発表が行われた。19日の午前はユダヤ教という観点からの研究発表があった。ヴワディスワフ・パナス教授は、シュルツをカバラーから解釈している論者の代表である。筆者も実際論文でパナス教授の論文を参照しており、この午前の部には大変興味をひかれていた。しかし、この午前の部を経て、こうした議論の前提としての、ユダヤ人シュルツを取り巻く宗教・言語的環境に対する調査の必要性、更に大戦間期ガリツィアと積極的に結びつけたシュルツ研究の欠如を改めて感じた。20日には、ポズナニのバルバラ・シェンケヴィッチ教授がデヴォラ・フォーゲルとの比較でシュルツを論じた。シュルツの第一短篇集となった『肉桂色の店』はフォーゲルとの文通から生まれたものであるが、この教授を除き、その研究はほとんどなされていない。イディッシュで創作したフォーゲルについては、私の

今後の研究課題でもあり、大変興味深かった。21日の最終日には、戦後ポーランド文学におけるシュルツの影響、ヘーゲルやルカーチと結びつけた発表などがあった。プログラムには、最終日の発表者として、シュルツの作品、書簡、資料の収集と紹介をなした、シュルツ研究の先駆者であり、第一人者であるイェジ・フィツォフスキの名前があったが、体調不良のため欠席となった。その代わりに、シュルツ生誕110周年・没後60年に際して刊行されたフィツォフスキの『大いなる異端の領域』に収められた、「ブルーノ・シュルツ、最後のおとぎ話」がパナス教授によって読み上げられた。

会期を通し、発表者による発表に対する質疑、議論もまた白熱していた。各自が各自のシュルツ論を持ち、シュルツのみを論じるこの4日間は、とりわけシュルツがいまだ広く知られているわけではない日本で研究する私にとって極めて刺激的であった。発表の合間の休憩、昼食や夕食などの時間を利用して、教授陣のほか、シュルツに関する論文で博士号を取得した若手の研究者達と議論することができたのも何よりの収穫だった。シュルツの生地である現ウクライナ領ドロホビチは、ピザの関係もあり未だ足を運んでいないのだが、当地在住の研究者と知り合うことができたため、今後の訪問も現実的なものとなった。

発表後の議論が連日長引き、夕方からの関連企画にずれこむこともしばしばであった。だが、上映、上演された作品のうち未見のものはあらかた見ることができた。17日には、文化センター「ハトカ・ジャカ」にて、アリーナ・スキーバ脚本・監督の短篇フィルム『ブルーノ・Sの伝記～ひきだしの奥から』、『旅行靴』、『時間の切符の闇売り』、19日には、途中からとなったがルドルフ・ジョウォ監督『夢の共和国』を見た。日本では未だシュルツの文学作品はマイナーであるが、それを基にしたこうした映像は、その文学を知らない者の関心をもひきつけうるものである。十数年ほど前に話題となったクエイ兄弟の『ストリート・オブ・クロコダイルズ』の現在も衰えない人気を鑑みても、こうした映像作品から原作へと遡る手順によるシュルツ紹介が可能なのではないかと感じた。18日にはグラジナ・

タポール演出の2002年初幕『肉桂色の店』の演劇があった。マネキン、女性の足といったシュルツ作品に典型的なモチーフを強調したものであった。

20日には、研究発表の昼休みを利用して、ルブリン城内のルブリン博物館にて19日から開かれていたシュルツの画作の展覧会「現実の神話化 ブルーノ・シュルツ1892-1942」を見に行った。ワルシャワの旧市街広場にあるワルシャワ文学博物館のコレクションであるが、全てが一堂に会するのを目にするのは初めてであった。シュルツの文学創作に先立つ、クリシェ・ヴェールという手法による連作『偶像賛美の書』、更に油彩画「出会い」、その他短篇集の挿絵として描いた絵が展示された。『偶像賛美の書』の画は、画集では拡大されているが、かなり小さなもので、作者シュルツの人物像を再考することとなった。写真撮影も許可されたので、ごくありふれたカメラしか持っていなかったが、大きさを参照する程度にはなると考え、撮影した。

会議ののちワルシャワへ戻り、ワルシャワ大学の海外交流課への挨拶、図書館や書店で資料調査を数日行い、26日にワルシャワから電車でベルリンに向かった。ドイツにおけるシュルツ受容についての調査、また、ベルリンにオープンしたユダヤ博物館の見学を目的としたものである。ユダヤ博物館は、オープン前に足を運んだことがあったが、正式のオープン後は初めてであった。以前は建築物のみだったため、今回はその展示資料の多さに驚いた。プレオープンの段階でも建物自体の体験型展示が話題となっていたが、資料展示もまた、体験型展示の最先端に行くものであった。ユダヤ文化、風俗についてこれまで書物からの知識は得ていたが、詳細な解説付きの実物を目にし、理解を深めることができた。また、2003年着工予定のホロコースト・メモリアル建築予定地にも足を運んだ。ベルリンの国立図書館での資料収集、現在ベルリンでポーランド文学、文化活動の基地となって出版事業も始めた「うだつのあがらないポーランド人クラブ」にて書籍を購入し、30日にワルシャワへ戻った。

ワルシャワでは、ワルシャワ大学図書館、国立図書館、ユダヤ研究所に日参し、シュルツ関連の研究書、統計資

料などの資料収集にあたった。限られた日数ではあったが、研究会で新たに知った論文、日本での研究の際不足を痛感した辞書など、現在必要とする書籍・資料は一通り集めることができた。また、ポーランドにおける外国の文献の翻訳状況を調べることは、現在のポーランドにおけるシュルツ研究のテーマ設定や議論の展開を理解する一助となった。

以上のような成果を得て、12日にワルシャワを発ち、13日に日本に帰国した。

〔 3 〕

シュルツ国際会議を中心とした今回のポーランドとベルリンにおける研修は、私の研究にとって非常に有意義なものとなった。とりわけ会議では、様々な切り口からの議論を一挙に聞くことにより、自らの研究の立場を客観的に捉えることができ、これからシュルツを論じる上での基本的立場や方向を見直すことができたのは何よりの収穫であった。ポーランドにおけるポーランド文学研究というものを相対的に評価する必要を改めて感じ、周辺地域との相関関係の中でシュルツを捉える調査研究の指針を再確認した。また、キトフスカ＝ウィシャック氏の厚意により、ポーランド語でシュルツに関する論文を書くチャンスも得ることができた。これには今後早急に取り組む予定である。

今回の渡航は日本国内でシュルツ研究を行う私にとって、より広いフィールドで研究を展開する一つの新たな出発点となった。このような機会を得ることができたのも、DESKの渡航援助ゆえである。心からの感謝の意をここに記したい。

加藤有子
（大学院総合文化研究科
超域文化科学専攻博士課程）



クロアチアにおける文献収集

〔 はじめに 〕

今回私はDESK助成金により、2002年11月1日から21日にかけて、文献収集を目的として、クロアチアのザグレブに滞在した。これら文献は、現在執筆中の博士論文第2部での分析対象である。私の研究テーマは、旧ユーゴスラヴィアで1960年代から70年代にかけて活躍したマルクス主義者グループ『プラクシス派』の理論と実践を、批判的に分析しようとするものであり、博士論文は、おおよそ次のような3部構成となる予定である。

第1部：プラクシス派のマルクス主義哲学

第2部：プラクシス派の社会・政治的批判

第3部：プラクシス派とナショナリズム

今回の渡航にあたっては、事前に第1部全体と、第2部の核となる部分の執筆を終えていた。したがって渡航の目的は、主に第2部における私の主張を裏付ける資料・文献の収集、具体的に言うと、プラクシス派の社会・政治に関する論文と著作の収集にあった。利用した機関は、主にナショナル・ライブラリーと、ザグレブ大学哲学科の図書室である。特に哲学科の図書室は、

新刊本は少ないながらも、プラクシス派哲学者の著作はほとんど全て所蔵しており、また、哲学科の先生方の好意により自由に利用できたため、スムーズに文献を集めることができた。以下にその具体的な成果を述べたい。

〔 成果 〕

私は論文の第1部において、プラクシス派のマルクス主義哲学がどのようなものであるかを明らかにするとともに、それを脱構築的手法によって読み解くことに焦点を当てた。プラクシス派の哲学は、プラクシス 疎外の対概念に基づいており、プラクシスの概念の普遍化を目的とする。プラクシスの概念は、人間の創造性、自主決定、理性などといった諸価値を含み、反対に疎外とは、こういった人間の普遍的な価値が抑圧され、実現を妨げられた状態を言う。プラクシス派の哲学者たちは、マルクス主義者であり、その哲学的な手法は弁証法である。弁証法とは否定の否定の原則に乗っ取って発展する法則であり、鍵となるのは、どの要素を第一の否定性として位置づけるかである。第1部を書いていく過程で、私は同じプラクシス派に属する哲学者たちの間でも、この否定性の理解において差が見られることを発見した。この差はとりわけ、ハイデガーの実存主義的思考に誘発されたガヨ・ベトロヴィチを代表とするザグレブ出身の哲学者



たちと、分析哲学の影響を受けたベオグラード出身のミハイロ・マルコヴィチらの間に強く見受けられる。

前者において、人間とはプラクシスそのものとして位置づけられる。プラクシスは、人間に本来備わっている本質であり、疎外はこの人間本質の疎外として考えられている。これに対し、後者にとってプラクシスとは、ただちに人間本質と結びつくものではない。彼らにとって人間本質とは、善悪両方を含む矛盾そのものであり、この矛盾を弁証法に基づいて解決するために、究極の価値としてプラクシスの概念が導入される。プラクシスは、最終的な判断基準として捉えられているのである。

論文の第2部を書くにあたり、私は以上述べた差異が、おそらくプラクシス派の社会・政治批判のテキストのなかにも見受けられるだろうと仮定した。この仮定に基づき、収集した文献を現在読んでいるのであるが、少なくとも現時点で、これを裏づけることができそうな予感がしている。以下は、帰国後これまでに得た成果の一部である。

ユーゴスラヴィアの社会主義は、自主管理社会主義と定義され、労働者の自主決定が最大の目標として掲げられた。プラクシス派の哲学者たちにとって、この自主管理システムは、彼らがプラクシスと呼ぶ人間にとっての最良の価値を実現するものでもあった。また、これを疎外状態に置くのは、国家および党の官僚主義であると捉えられた。哲学の領野で彼らが理論化を試みたプラクシス 疎外の対は、社会・政治批判の領野では、このように自主管理 官僚主義の対として捉え直されている。

さて、ペトロヴィチやミラン・カングルガなどのザグレブ出身の哲学者たちのテキストを見ると、自主管理 官僚主義の対は、部分的に自主管理 国家へと変容し、非常に強い敵対関係を伴って現れることに気付かされる。国家と国家官僚の介入ある限り、自主管理は達成されず、したがって自主管理の主体である労働者も、その本来のプラクシスとしての主体性を構築することができない。これに対し、マルコヴィチやスヴェトザール・ストヤノヴィチといったベオグラード出身の哲学者たちのテキストにおいては、自主管理 国家の対はそれほど強い敵対関係を

構成しない。国家はただちに否定性とは結びつかず、プラクシスという価値基準により否定性として判断された要素のみが、第二の否定を受ける。自主管理主体としての労働者にしても、その主体性はただちに完全なるプラクシスの主体となるわけではなく、価値基準としてのプラクシスによる判断を経て、普遍性を獲得すると考えられるのである。

以上が、これまでに目を通したテキストから分析した内容であるが、単なる叙事的な記述を避け、私なりの批判を行うためには、この分析により明らかにした点を、理論的に図式化する必要があった。この試みはテキスト分析の部分とともに、帰国後暫定的に1章分(第3章：プラクシスを実現するシステムとしての自主管理制度)としてまとめ、エッセックス大学のPhDセミナーで発表した。この論文で問題としたのは、次の点である。ザグレブの哲学者たちのように、労働者をただちにプラクシスと結びつけるにせよ、ベオグラードの哲学者たちのように、プラクシスを通して労働者としての主体性が現れると考えるにせよ、どちらにしても、目指される主体とは完全なる普遍的な主体である。また、ここにおいては、不完全性は放逐されるべき対象として捉えられる。主体は完全性を前提とし、不完全性が主体の根本的な構成要素となることはない。紙面が限られているため、詳しい説明は省略するが、このようにプラクシス派が前提とする完全性を批判するため、私はラカンの精神分析理論を用い、主体性に関するザグレブ・グループとベオグラード・グループとの考え方の差異を、想像的同一化(理想的イメージとしてのプラクシスとの同一化)と象徴的同一化(他者の場所としてのプラクシスとの同一化)との違いとして図式化した。更にどちらにおいても、完全なアイデンティティの構築不可能性を示唆する、現実界の次元が排除されている点を指摘した。次の章(第4章：プラクシス派と党との関係)において、私は党の存在が、プラクシス派の批判に関わらず、自主管理主体の普遍性を支える上で必要不可欠である点を論じるつもりである。第3章との関係から言って、ここでは党存在が現実界の介入から主体の完全性を守る役割を果たしているというの

が、現時点での仮定である。

抽象的な内容になってしまったが、以上が調査旅行によって得られた具体的な成果である。最後に、今回の渡航を可能にくださった審査員の先生方、またザグレブで手続きを代行してくださった哲学部の先生方に、感謝の意を記したい。

茂野 玲

(大学院総合文化研究科
超域文化科学専攻博士課程)



ルーマニアにおける資料収集

2002年8月24日より10月8日まで博士論文等に必要資料を集めるため、ルーマニアを訪問した。現在、東欧諸国には西欧の主要な航空会社が乗り入れており、現地に辿り着くためには様々な方法があるが、日本の東欧研究者が最もよく利用するのはやはりウィーン経由のオーストリア航空であろう。その理由としてはウィーンが地理的に目的地に最も近いということだけでなく、この町自体東欧的なところがあり(実際、東欧出身の労働者が町のあちこちで見かけられる)親近感を覚えるということが挙げられるであろう。

筆者もこうして今回もウィーン経由でブカレスト入りしたが、往路、復路ともその日のうちには乗り換えられないため、ウィーンでそれぞれ一泊した。この町で筆者が好んで泊まるのは「ハルギタ」と称するペンションであるが、今回もそこに泊まった。ハルギタとは現在、ルーマニアの一部となっているトランシルヴァニア地方の東部にある県の名前であり、ルーマニア語ではHarghitaと記される。ところが、このペンションではHargitaと書かれており、gの後のhが見当たらない。実はこれはハンガリー語の綴りなのである(これに対し、ルーマニア語ではgiはジ、ghiはギと発音される)。数年前に滞在した際に教えられたが、このペンションを経営しているのは1970年代の後半にトランシルヴァニア地方よりウィーンに移住したハンガリー人の家族であるということである。従ってこのペンションではドイツ語の他にハンガリー

語も通じるが、家族の中にはルーマニア語も覚えている人がおり、興味深い。また、内装もトランシルヴァニア風で、現地から運ばれてきたのか、木製の家具が備わっており、ウィーンを中心部にいながら一瞬トランシルヴァニアに戻ったような錯覚に陥る。入り口のホールの壁には陶器の皿の他、中世のハンガリー王国の地図が掲げられている。現在のスロヴァキア、ルーマニア、セルビア等の一部が含まれていたいゆる「大ハンガリー」時代のものである。二つ星で全部で10部屋しかないが、中は清潔で快適であり、最も安いシャワー、トイレ共同のシングル（朝食別）で一泊31ユーロという手頃な値段となっている。繁華街のマリアヒルファー通りに面し、西駅から地下鉄で一つ目のZieglergasseの市内中心部寄りの出口の目の前にあるということからもわかるように、場所的にも極めて便利であり、お勧めである。このような「東欧」を感じさせる宿が中心部に立地しているというのもウィーンならではのことであろう。

翌日には予定通りルーマニアに到着した。ブカレストの町は相変わらず乾燥して埃っぽい。1990年代に入ってから大量の木が伐採され、市内の緑は半減したといわれている。排気ガスによる大気汚染もひどく、首都の市民は地方の人々に比べて数年程度平均寿命が短いとされている。中欧と同じくルーマニアでも8月中旬には全国各地で洪水の被害が深刻であったが、もうそれは収まっていた。しかし、9月は天気がやや不安定で夕立にしばしば見舞われたが、相変わらず通りには配水施設が備わっていないため、たちまち大きな水溜りができ、歩くと足元が泥だらけになってしまう。かつて「バルカンの小パリ」といわれていたブカレストは最近ではかくして「小ヴェネツィア」と揶揄されている。市内中心部は大通りのアスファルトを舗装し直していたため、あちこちの交差点で交通渋滞がかなりのものとなっていた。社会情勢は安定してきてはいるものの、街角には相変わらずストリートチルドレンが少なくなく、国民の経済状況は相変わらず厳しいままである。ブカレスト滞在中下宿していたアパートでは最初の数週間はお湯がほとんど全く流れず、不便な生活を強いられた。毎夏のこと

であるが、この時節にはお湯を供給する施設が定期的に改修工事が行われるのである。

5ヵ月ぶりの訪問であったが、耳にするルーマニア語には違和感を感じなかった。東京にいてもドイチェ・ヴェレやBBC、あるいはプラハに拠点を置く自由ヨーロッパのルーマニア語放送を毎日のように聞き流していたためであろう。現在はインターネットでこれらの他、ルーマニアのほとんど全ての新聞が地方紙も含めて読めるので便利である。

さて、現地到着翌日から早速、ブカレスト大学中央図書館に通い始めた。1989年12月末の「革命」で、その反対側に面する国立美術館とともに大きな被害を受けて2000年の夏まで別の場所で臨時に機能していたこの図書館もようやく修復工事が終わり、2001年11月末に再開して以来、かなり利用しやすくなった。受付ではバーコードの付いた入館証を提示し、有効期限が切れていないことが確認されると、館内を利用するための別のカードと荷物を預けておくためのロッカーの鍵を渡してくれる。中央のホールに入り、別の受付で希望するホールを申し出ると、コンピューターで座席が割り当てられる。当該ホールに辿り着き、カードと注文票を渡して自分の席で待っていると大抵15分以内には注文した本や雑誌、新聞を運んできてくれるという、西側並みの極めて近代的なシステムである。内装もモダンかつ機能的で、各席には小さな明かりを点けることもできる。筆者が日本に帰った後の10月10日前後にルーマニアを訪問された紀宮さまもこの図書館に案内されたほどである。

ちょうど夏休み期間中ではあったが、開館時間は幸い通常のみで、日曜日も昼過ぎまで開いているので週末も含めて毎日通うことができ、大助かりであった（月～金曜日は8:30～20:00、土曜日は8:30～18:00、日曜日は8:30～14:00）。その代わり2階以上の階のホールは新学期が始まるまで閉まっていた。開いていた1階の三つのホールのうち、第一ホールはEU加盟を目指すルーマニアを象徴するかのごとく「ヨーロッパ」と称し、EU関係の雑誌や文献が揃っているが、筆者がもっぱら利用しているのは雑誌や新聞が置かれている第三ホールである。ここには国内で発行さ

れている主要な新聞の他、西側の主要な新聞や雑誌が棚に置かれており、注文した文献が届くまで時間はいくらかもつづすことができる。2002年11月23日に大阪の国立民族学博物館で行われる予定の科研基盤研究C「ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究」と称するワークショップに参加することになっていることを考え、ルーマニアの新聞の社会面に目を通したりした。これは共産主義体制崩壊後の旧社会主義国家の変容を様々な角度から考察するというものである。また、9月に実施されたドイツの総選挙やセルビア大統領選挙の動向に関してもルーマニアの新聞を通してかなりの情報を得ることができた。

今回は主に1920年代の新聞に目を通した。当時は各紙とも政党の機関紙といった色彩が強く、敵対する政党への批判が激しいが、その点を考慮しつつそれぞれの新聞を比較ながら読めば、複数の視点を伺い取ることができ、興味深い。1918年にルーマニアはオーストリア、ハンガリー、ロシアからそれぞれブコヴィナ、トランシルヴァニア、ベッサラビアといった三つの地域を併合して人口、面積共に倍以上となるが、最初の数年間は各地方の利害が激しく対立し、四つの地域の統合が困難であったことが伺えた。2003年5月11日に愛知県立大学で開催予定の日本西洋史学会第53回大会で「第一次世界大戦後のルーマニアの地方行政改革」というテーマで発表することになっているが、必要な資料をある程度集めることができたと考えている。

この図書館にもコピー機は備わっている（A4は一枚1000レイ（約4円）、A3は一枚2000レイ（約8円））ものの、新聞は複写することが禁じられているので不便である。数ヵ月分がまとめて綴じられており、サイズそのものが大きく、コピー機に乗せること自体が困難だからであろう。そこで仕方なく、必要な部分をルーズリーフに書き取るという作業を行ったが、やはりかなりの時間がかかってしまった。新聞の他は国会議事録を閲覧したが、新聞と異なり、見出しが付けられていないため、丹念に目を通す必要があり、骨が折れた。館内にはピュッフェもあり、ここで簡単な軽食を取ることも可能である。

サンドイッチやスパゲティ、サラダの他、サルマーレ（ロールキャベツ）、ママリガ（とうもろこしの粉をこねたもの）、ムサカ（挽肉、ジャガイモ、茄子などをはさんで揚げたもの）といったバルカン料理も味わうことができる。そこから外を眺めるとちょうど「革命広場」が見える。その前にはかつて共産党中央委員会が利用していた上院の建物があり、1989年12月末にチャウシェスク大統領が最後の官製集会を開いた際に野次を飛ばされて屋上からヘリコプターで逃げ去ったという、日本でもテレビに映された場所であるが、現在でもこの広場ではしばしば労組のデモが開かれ、図書館にいても人々のシュプレヒコールが聞こえてくるということが少なくない。

また、ルーマニア・アカデミー図書館にも通った。こちらの方も新しい建物が昨年の12月に完成したが、閲覧室は依然旧来の建物にある。中は寒々としており、やや照明は暗く、快適とは言いがたい。開館時間もやや短い。7月15日より9月16日までは月～土曜日は8:00～14:00が開館時間で、それ以降は月～木曜日は閉館が18:00となっている。但し、蔵書は大学中央図書館よりはるかに充実している。新聞や雑誌の種類も多く、欠落している号数も少ない。利用者は圧倒的に年配の研究者が多く、きちんとネクタイを締めている人も少なくない。ややジーンズでは入

りにくいアカデミックな雰囲気が漂っている。

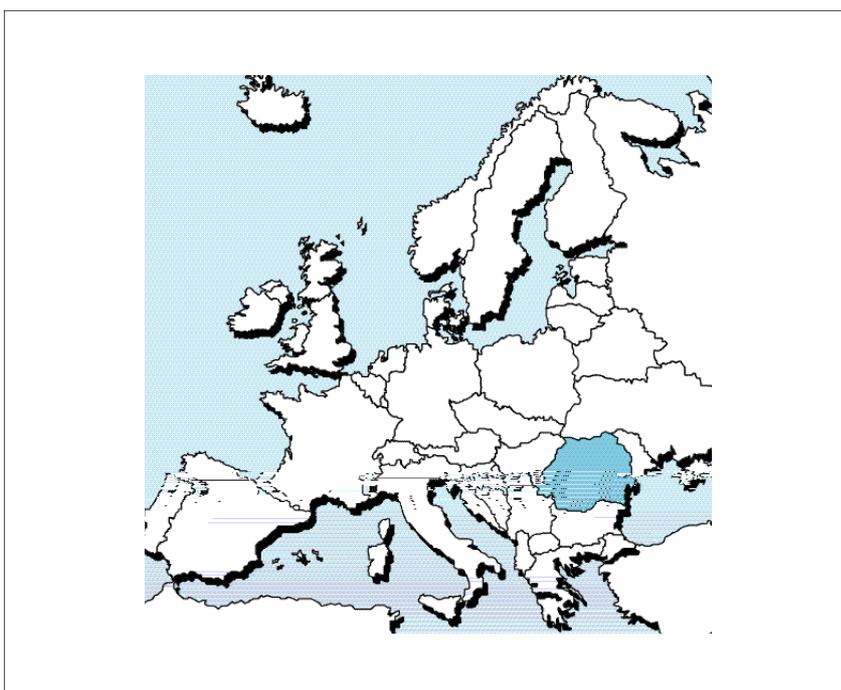
それから国立図書館も利用した。こちらの方は外国人でも所定の用紙に記入して顔写真を一枚渡し、パスポートを提示すれば簡単に無料で入館証を発行してくれる。8月は夏休みで休館であったが、それ以降は月、土曜日は9:00～17:00、火～金曜日は8:30～20:00が開館時間となっている。但し、ホールによってはこの閉館時間よりもずっと前に閉まってしまうことがあるので注意が必要である。この図書館も数字の上ではかなりの蔵書数を誇っているが、あいにくそのうちの大半は未整理で倉庫に眠ったままであり、閲覧することができないのが残念である。今回はユーゴスラヴィアのヴォイヴォディナ地方の主要な都市の一つであるノヴィサドに関して書かれた3冊の本（英語版、独語版、ルーマニア語版）を閲覧し、それぞれ少しずつコピーを取った（ここもA4は一枚1000レイであったが、両面コピーにすると二枚で1800レイ（約7円））。なお、ノヴィサドに関する資料を集めようとしたのは2003年4月に刊行予定の「バルカン」の入門概説書『バルカンを知るための65章』（明石書店）でこの町についても執筆することになっているためである。

その他、足を運んだのは国立文書館である。ルーマニアでも1989年の体制変動後、国立文書館が外国人研究者に

も利用可能となり、未刊行史料を用いて本格的に研究するという道が開かれたことは誠に喜ばしい。必要なファイルを探し出したり、注文するのにファイルの番号を一つずつ注文票に記入したりするのは手間がかかるが、国王フェルディナンドや首相ブラティアヌといった当時活躍した政治家らの署名に直接触れることができるのは文書館ならではのことである。目下のところ1920年代前半の行政に関する史料を中心に調べているが、例えばハンガリー領からルーマニア領に移ったトランシルヴァニア地方では従来のハンガリー人の役人がルーマニア国家に対して宣誓を行うことを強いられたり、ルーマニア語の習熟度を調べるために試験を課されたりといったような様々な問題があったことが生の史料から知ることができたのは有益であった。

中島崇文

（大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻博士課程）



DESK主催シンポジウム カール・シュミットと現代

— 例外・秩序・神話・政治 —

日時：2003年9月27日（土曜日）、28日（日曜日）

両日とも13:00～18:00

場所：東京大学駒場キャンパス 数理科学研究科棟大講義室

「大統領の孤独な決断」、「悪魔」と「悪の枢軸」、「戦争」と「敵と味方」。21世紀に入るや、世界には突如、「非常事態」が生じたかのようにカール・シュミットを思い起こさせる言説がはびこっています。イタリアやドイツのファシズム、ソビエト・ロシアのプロレタリアート独裁、あるいは議会制民主主義の機能不全を抱えたワイマール共和国などが半世紀以上も遠い歴史の彼方に去ったかに見えるにもかかわらず、ワイマール共和国、ナチス第三帝国、そして戦後と、類い希な「例外状況」に本領を発揮した公法学者カール・シュミットに帰せられる不気味な概念の数々が今日またその怪しい魅惑を放ち始めているようです。DESKでは今年度のシンポジウムの一つとして「カール・シュミットと現代」を開催したいと考えます。

政治は政治専門の職業政治家や政治学者の案件でも、また例外的非常事態をまっぴりやうやく発現するものでもありません。「政治的なもの」が、カール・シュミットの言うように、善悪に関する道徳・倫理観や美醜に関わる美学や損得に関わる経済学などの一切が究極的に「敵か味方か」に結晶する地点であるならば、政治は一定の秩序もって営まれている日常世界において

その全幅的な広がりと深さにおいて思考されている必要があると思われます。「カール・シュミット」という現象はすぐれてドイツ・ヨーロッパ的な現象です。その「政治的なものの概念」や「議会制民主主義論」、あるいは「政治神学」などに対して一定のスタンスを決定するには、少なくとも18世紀以来の全ヨーロッパの政治思想や法思想の系譜や経済的・社会的総体だけではなく、それを遙かに遡るキリスト教神学、ヨーロッパ文学、神話学等々の知識をも要求します。にもかかわらず、カール・シュミットがああドイツ・ヨーロッパの例外的な事態の中で提起した問題設定や疑念の数々が単にドイツやヨーロッパにとどまらず、広く世界でインパクトをもって受け止められ、また政治的立場や宗教的基盤を超えて議論されるのは、まさにカール・シュミットの議論にある種の普遍性が支えているからに他なりません。アジアの、日本の、東京の、目黒区の、駒場のキャンパスはその種の普遍性を率直に真摯に問うのにふさわしい場所であるかもしれません。

現今の世界政治は、キリスト教とユダヤ教という区分が前面に出ていたカール・シュミットの時代とは様変わりして、イスラーム世界を一方の陣営にま

とめて「文明と衝突」とも「宗教戦争」とも見える「敵と味方」を形成しているようにも見えます。二日間に亘るシンポジウムは政治と法をもっとも広い意味でとらえ、宗教・神話・神学・文学に亘って「カール・シュミットと現代」を討論したいと考えています。

現在、折衝中の外国からの招待者は以下の通りです。

- ・劉小楓
中国・中山大學教授
(比較宗教学)
- ・トーマス・シュスタク
ドイツ・フランクフルト大学
助教授
(比較文学・文芸理論)
- ・ギル・アニジャール
アメリカ・コロンビア大学
助教授
(ヘブライ文学・文芸理論)

なお、これはあくまで予定です。詳細は適宜、DESKホームページ <http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp> をご覧下さい。

白井隆一郎
(DESK運営委員長・言語情報科学専攻)

DESK主催シンポジウム

バルカン

ヨーロッパを考えるひとつの視座

The Balkans: An Approach to European Studies

日時：2003年3月29日（土曜日）10：00～18：00

場所：東京大学駒場キャンパス 数理科学研究科棟大講義室
東京都目黒区駒場3-8-1（京王井の頭線駒場東大前駅下車）

英語同時通訳付き / 入場無料

挨拶

臼井隆一郎 (Ryuichiro Usui)

東京大学大学院総合文化研究科言語
情報科学専攻教授・DESK運営委員長**セッション1 (10:30～12:45)**ヨーロッパ現代史におけるバルカン
バルカンとはなにか**報告**

K．カーザー (Karl Kaser)

グラーツ大学教授、グラーツ大学附属
バルカン社会・文化研究センター長

M．トドロヴァ (Maria Todorova)

イリノイ大学 (アーバナ・シャンペ
イン) 教授

P．ヴォドピヴェツ (Peter Vodopivec)

リュブリャナ現代史研究所研究員、
前リュブリャナ大学教授**コメント**

柴 宜弘 (Nobuhiro Shiba)

東京大学大学院総合文化研究科地域
文化研究専攻教授**司会**

H．クラインシュミット

(Harald Kleinschmidt)

筑波大学社会科学系政治学専攻教授、
DESK客員教授**セッション2 (14:15～16:00)**

バルカン現代史における暴力の問題

報告

W．ヘブケン (Wolfgang Höpken)

ゲオルク・エッカート国際教科書研
究所所長、ライプツィヒ大学教授

M．マゾワー (Mark Mazower)

ロンドン大学バークベックカレッジ
教授**コメント**

小沢弘明 (Hiroaki Ozawa)

千葉大学文学部教授、東京大学大
学院総合文化研究科非常勤講師**司会**

石田勇治 (Yuji Ishida)

東京大学大学院総合文化研究科地域
文化研究専攻助教授**全体討論 (16:30～18:00)****コメント**

A．ゴードン (Andrew Gordon)

ハーヴァード大学教授、東京大学大
学院総合文化研究科客員教授

木畑洋一 (Yoichi Kibata)

東京大学大学院総合文化研究科国際
社会科学専攻教授・評議員**司会**

柴 宜弘 (Nobuhiro Shiba)

DESKの催事情報については、
ホームページ(<http://desk.c.u-tokyo.ac.jp/What's-new.html>) をご覧ください。今後の催事情報をいち早くメール送信いた
します。ご希望の方はメールでDESK事務
室 (desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp) ま
でお申し込み下さい。**DESK事務局**

開室日：月曜～金曜（祝日除く）

住 所：〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院

総合文化研究科・教養学部

8号館1階109号室

Homepage:

<http://desk.c.u-tokyo.ac.jp>

E-mail:

desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp

Telephone & Fax:

03-5454-6112